

潜在被害者の空間行動に注目した犯罪被害予防の可能性

島田 貴仁*

Potential for Crime Victimization Prevention Focusing on Spatial Behavior of Potential Victims

Takahito SHIMADA*

The study aims to examine space-time concentrations and journey to victimization of stranger-sexual assaults based on routine activity theory and space-time geography. The study investigated 568 forcible sexual assaults and molesters incidents occurred on streets or public spaces and reported to police in 5 cities in Tokyo. On the day of the each incident, departure/arrival time and transportation mode of coded from the files. Then 3D-GIS was utilized to visualize space-time activity paths and conversion of victims and offenders where z-axis corresponds to the hour on the day. Of the cases surveyed, 78% occurred while victims were walking or riding bicycle. Moreover, 80% of such cases occurred on the victims' journey to home from train station after 11PM. Space-time patterns in a day were also observed: crimes at late night occur at location further away from stations than early night. These victims walk/ride bicycle longer because public-bus service terminates late at night. These results imply importance of problem-oriented approach where safer mobility is offered to young women who go back to home late at night. Also, victim awareness program should focus on high-risk situations caused by lifestyle and routine activities of potential victims.

Keywords: 環境犯罪学(Environmental Criminology), 日常活動理論(Routine Activity Theory), 被害化行程(Journey to Victimization)

1. はじめに

女性に対する犯罪は、世界的な課題となっている。WHO の調査によると女性の 3 人に 1 人はパートナーまたは非パートナーからの暴力被害を報告している。女性に対する犯罪は被害者-加害者関係によって、親密な関係者間暴力と見知らぬ人 (stranger) によるものに分けることができる。見知らぬ人からの性的暴行は、被害者に対してはトラウマやストレスといったネガティブなアウトカムをもたらす (Denkers & Winkel, 1998; Meyer & Taylor, 1986) とともに、非被害者に対しても強い犯罪不安をもたらす。 (Archer, 2019; Pain, 1997)。この犯罪不安は、女性の外出を減少させ女性の社会参加を阻害し、生活の質を悪化させる (Keane, 1998; Riger et al., 1982)。このため、非面識者からの犯罪被害の削減・予防は、社会的に大きな課題だといえる。

非面識者からの性的暴行は道路や商業施設といっ

た公共空間で発生する。このため、環境犯罪学のフレームワークが、非面識者からの性的暴行に対して適用されてきた。一つ目のアプローチは、犯罪の時時空間的な集中の検出である。street crime や burglary は特定の時間・場所に抽出することが知られている (Weisburd, 2015)。性的暴行に関しても、カナダやオランダで空間的な集中が報告されている (Andresen & Malleson, 2011; Bernasco & Steenbeek, 2017)

第二のアプローチは、駅や公園など特定の施設に注目して、その被害リスクを上昇させる要因を検討するのである。中でも、バス停の存在は、性犯罪や対人暴力犯罪の被害リスクを増大させる (Ceccato, 2014; Gerell, 2018; Kooi, 2013; Stucky & Smith, 2017)。これらからは、潜在的な被害者・加害者の空間移動が、犯罪の加害・被害に影響していることが伺える。

第三のアプローチは、犯罪者や被害者の空間行動に注目するものである。日常活動理論および犯罪パ

* 正会員 科学警察研究所犯罪予防研究室 (National Research Institute of Police Science)
〒277-0882 千葉県柏市柏の葉 6-3-1 Tel : 0471-35-8001 E-mail : takajin@nrrips.go.jp

ターン理論によると、拠点からの犯罪者および潜在被害者の空間行動が交錯した際に犯罪機会が発生する。Journey to Crime (JtC) 研究の初期の研究は、犯罪者及び被害者の居住地と犯罪発生地点との間の幾何学的な関係をみるのにとどまっていたが(Block et al., 2007; Chopin & Caneppele, 2019; Groff & McEwen, 2007), 近年は、犯罪者のみならず、被害者が被害に至る空間移動(Journey to Victimization) に注目した研究も存在する(Ceccato et al., 2017; Hewitt et al., 2020; Hodgkinson & Tilley, 2007; Pizarro et al., 2007))。そのうち、Ceccato et al. (2017)は、病院で収集した性犯罪被害者の被害直前の空間行動をケースクロスオーバーデザインで調査し、屋外にいることは必ずしも被害リスクを増加させないことを示している。

本研究は、都市機能が高度に発達して人々が夜型のライフスタイルを採用した東京において、非面識者からの性的被害の時空間集中と被害者の被害への行程を検討する。さらに、問題解決型警察活動の考え方を導入して、被害削減のための方策を考察する。

2. データ

「警視庁子ども・女性の安全対策に関する有識者研究会」は、2020-2021年にかけて、子ども・女性に対する犯罪のうち、特に公共空間における非面識型の犯罪の安全対策について、刑事政策、地理学、犯罪学、都市工学、倫理学、社会工学及び心理学の各領域の研究者が参画して検討した研究プロジェクトのである。

研究全体では、犯罪統計の分析、実態調査、現地実査を実施し、うち実態調査では、東京都下の5警察署管内で2014-17年の間に、公共空間で発生して警察に届け出があった子ども・女性に対する犯罪・前兆事案(n=1996)を調査した。公共空間とは、道路、公園、駐車場等の不特定多数の者が出入りできる場所であり、集合住宅においてはエントランス、廊下、エレベーター、階段といった誰かがアクセスすることができる部分を含む。また、商業施設における売り場など、客であれば誰でも利用可能な場所も含む。

事案の発生時間・発生場所の住所・属性といった基礎情報に加え、事件当日の被害者・被疑者(判明

している場合)の空間移動をパーソントリップ形式で把握した。具体的には、出発場所・時間、到着場所・時間、目的、交通手段、同伴者の有無とした。

本論文では、そのうち、強制性交・強制わいせつ(n=286)、身体接触を伴うちかん(n=606)を分析対象とした。

被害者の平均年齢は、21.43歳(S.D.8.9歳)。就業状況は、学生466名、就業者358名、学生、無職33名、その他・不明35名であった。

3. 結果と考察

3.1. 被害の発生時間帯と被害者属性・場所

図1は、被害者の職業別の事件の発生時間帯を示す。小学生の被害は14-18時頃が多く、中高生の被害は16-22時頃が多く、大学生以上は22時以降の被害が多い。また、場所別(図2)にみると、深夜時間帯の道路上での被害が多い。深夜時間帯における徒歩・自転車の移動場面での被害が顕著であったことは、他の通行人が少なく、日常活動理論でいうところの「能力のある守り手」がいない状況での移動の危険性が伺える。

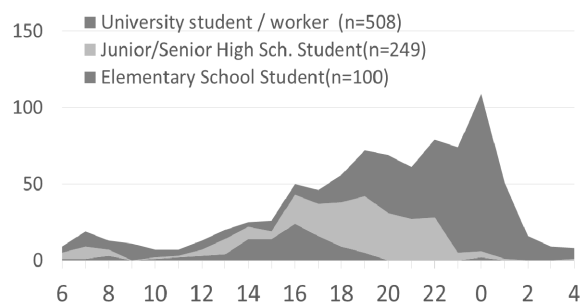


図1 事件の発生時間帯(被害者の職業別)

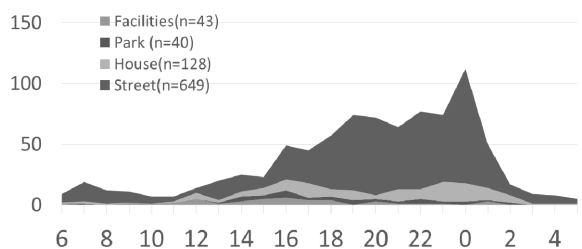


図2 事件の発生時間帯(発生場所別)

3.2. Journey to victimization (JtV)

また、被害当日の被害者の空間行動については、調査対象となった892事案のうち546事案で793

トリップが同定された。

被害にあったトリップにおける移動手段は図3に示すようにそのほとんどが徒歩であった。また、被害にあったトリップの出発地点の内訳を図4に示す。特に深夜時間帯に発生する被害では、鉄道駅を起点とする被害が占める割合が顕著になっていた。これらは、深夜時間帯における徒歩・自転車によるトリップが主に鉄道駅から発生していることが原因だと考えられるが、犯罪者が駅を出発する潜在被害者を選択的に追尾している可能性もある。

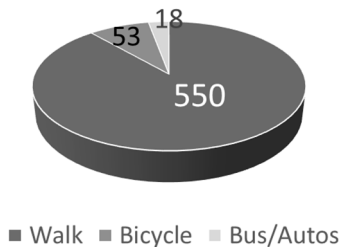


図3 被害化行程における出発地点

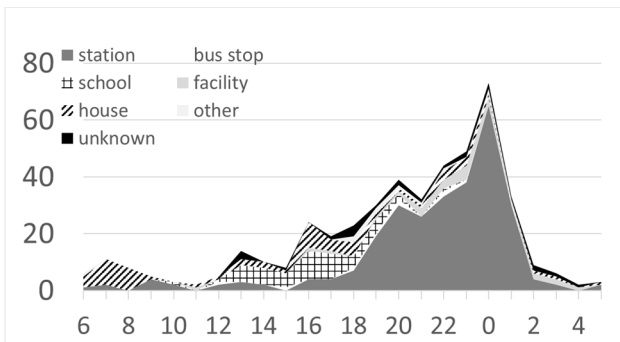


図4 被害化行程における出発場所

駅を起点にした被害化行程で、出発地点となった駅と、目的地となった自宅の間の距離を図5に示す。深夜になるほど、自宅から1000m以上の自宅に向かって移動している際の距離が目立っている。これは、深夜時間帯では駅から自宅までの路線バスといった二次交通手段がなくなって、長距離を移動している中で、犯罪者に狙われているものと考えられる。

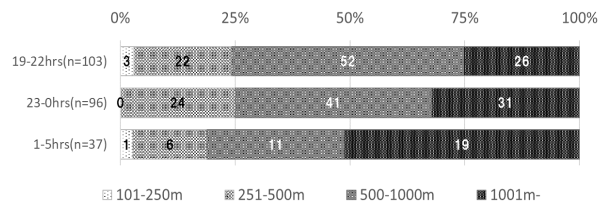


図5 被害者の駅と自宅間の距離

また、詳細な空間行動が得られた強制性交や強制わいせつにおいて、駅から自宅に移動している途中でのコンビニエンスストアへの立ち寄りの有無を調べたところ、時間帯が遅くなるほど、被害直前にコンビニへの立ち寄りが顕著に出現していた(図6)。

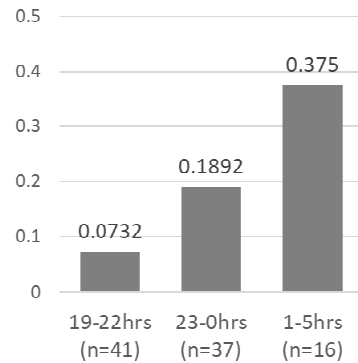


図6 コンビニエンスストアへの立ち寄り割合

3.3. 考察

今回の分析から、深夜時間帯に駅から徒歩や自転車で帰宅する際の被害は、他の時間帯と比較して、被害場所から被害者自宅間、駅から被害者自宅間、駅から被害場所間の距離が、それぞれ長くなること示された。自宅敷地での被害の割合には差がないことから、深夜時間帯は、通行人が少なくなることに加え、駅から自宅までの移動距離が長くなるといった理由によって移動途中に加害者に見定められる可能性が高まると考えられる。また、深夜時間帯の事案では、被害者がコンビニへ立ち寄っている割合が高かった。深夜時間帯は、移動距離が長くなってコンビニへの立ち寄り機会が増加するのに加え、コンビニ店内の利用者が少なくなるため、被害者が加害者に見定められる可能性が高くなった可能性がある。

米国の National Research Council (2004) は、警察

活動を、「対象の絞込み」×「対策や関与者の多様性」の2軸から分類している。このうち、犯罪の空間的集中に注目したホットスポット警察活動は、欧米や日本でも著名であり、日本における子供・女性に対する犯罪についても被害の時空間的集中や近接反復被害が観察されている(Amemiya et al 2020; 菊池ら2009;2010)が、子供・女性に対する犯罪の暗数化傾向の強さからは、近接反復被害の現象に従って、事案が通報された特定区域での警戒を強めるだけでは実効性にはやや疑問が残る。他方で、非面識者からの性犯罪被害防止の一次予防では、潜在被害者に対する防犯教育が広く行われるが、ともすれば、総花的に犯罪予防行動を呼びかけ、過度の自制をはかるものになりかねない。

本研究の結果は、犯罪の発生場所のみならず、潜在被害者の空間行動の文脈に着目することによって、被害者に過度の自制を求めずに、潜在被害者の安全性を高めることが可能だと思われる。具体的には、深夜時間帯の安全対策として、駅から自宅への安全な帰宅手段の確保、深夜時間帯の駅やコンビニにおける放送による注意喚起、警察官による駅に対する立ち寄り警戒等が考えられる。

絞り込んだ対象に多様な方法で介入する問題解決型警察活動は、北米および欧州ではメタ分析によってその有効性が立証されている(Weisburd,2008; Hinkle,2020)。今後、単に犯罪多発地点に注目するだけではなく、潜在的加害者・被害者の空間行動の洞察に基づく問題解決型活動の実施が期待される。

参考文献

Amemiya, M., Nakaya, T., & Shimada, T. (2020). Near-repeat victimization of sex crimes and threat incidents against women and girls in Tokyo, Japan. *Crime Science*, 9, 1-6.

Andresen, M. A., & Malleon, N. (2011). Testing the stability of crime patterns: Implications for theory and policy. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 48(1), 58-82.

Archer, R. J. L. (2019). Sexual assault victimization, fear of sexual assault, and self-protective behaviors: A test of general strain theory. *Victims & Offenders*, 14(4), 387-407.

Bernasco, W., & Steenbeek, W. (2017). More places than crimes: Implications for evaluating the law of crime concentration at place. *Journal of Quantitative Criminology*, 33(3), 451-467.

Ceccato, V. (2014). Safety on the move: Crime and perceived safety in transit environments. *Security Journal*, 27(2), 127-131.

Ceccato, V., Wiebe, D. J., Eshraghi, B., & Vrotsou, K. (2017). Women's mobility and the situational conditions of rape: Cases reported to hospitals. *Journal of Interpersonal Violence*, ,

0886260517699950.

Chopin, J., & Caneppele, S. (2019). Geocoding child sexual abuse: An explorative analysis on journey to crime and to victimization from French police data. *Child Abuse & Neglect*, 91, 116-130.

Denkers, A., & Winkel, F. W. (1998). The social and personal influence of positive beliefs on coping with direct and indirect victimization. *Psychology and Criminal Justice: International review of theory and practice* (pp. 354-366). Berlin: De Gruyter.

Gerell, M. (2018). Bus stops and violence, are risky places really risky? *European Journal on Criminal Policy and Research*, 24(4), 351.

Groff, E. R., & McEwen, T. (2007). Integrating distance into mobility triangle typologies. *Social Science Computer Review*, 25(2), 210-238.

Hewitt, A. N., Chopin, J., & Beauregard, E. (2020). Offender and victim 'journey-to-crime': Motivational differences among stranger rapists. *Journal of Criminal Justice*, 69, 101707.

Hinkle, J.C., Weisburd, D., Telep, C.W., Petersen, K. Problem-oriented policing for reducing crime and disorder: An updated systematic review and meta-analysis. *Campbell Syst Rev*. 2020; 16:e1089. <https://doi.org/10.1002/cl2.1089>

Hodgkinson, S., & Tilley, N. (2007). Travel-to-crime: Homing in on the victim. *International Review of Victimology*, 14(3), 281-298.

Keane, C. (1998). Evaluating the influence of fear of crime as an environmental mobility restrictor on women's routine activities. *Environment and Behavior*, 30(1), 60-74.

菊池城治・雨宮護・島田貴仁・齋藤知範・原田豊 (2009) 声かけなどの不審者遭遇情報と性犯罪の時空間的接近性の分析 犯罪社会学研究, 34, 151-163.

菊池城治・雨宮護・島田貴仁・齋藤知範・原田豊 (2010) 近接反復被害の罪種間比較：時空間 K 関数の応用 GIS 理論と応用, 18(2), 21-30

Kooi, B. R. (2013). Assessing the correlation between bus stop densities and residential crime typologies. *Crime Prevention and Community Safety*, 15(2), 81-105.

Meyer, C. B., & Taylor, S. E. (1986). Adjustment to rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50(6), 1226-1234.

National Research Council (2004). Fairness and effectiveness in policing: The evidence. Washington, DC:National Academies Press.

Pain, R. H. (1997). Whither women's fear? perceptions of sexual violence in public and private space. *International Review of Victimology*, 4(4), 297-312.

Pizarro, J. M., Corsaro, N., & Yu, S. V. (2007). Journey to crime and victimization: An application of routine activities theory and environmental criminology to homicide. *Victims & Offenders*, 2(4), 375-394.

Riger, S., Gordon, M. T., & LeBailly, R. K. (1982). Coping with urban crime: Women's use of precautionary behaviors. *American Journal of Community Psychology*, 10(4), 369-386.

Stucky, T. D., & Smith, S. L. (2017). Exploring the conditional effects of bus stops on crime. *Security Journal*, 30(1), 290-309.

Weisburd, D., Telep, C.W., Hinkle, J.C. and Eck, J.E. (2008), The Effects of Problem-Oriented Policing on Crime and Disorder. *Campbell Systematic Reviews*, 4: 1-87. <https://doi.org/10.4073/csr.2008.14>

Weisburd, D. L. (2015). The law of crime concentration and the criminology of place. *Criminology*, 53(2), 133-157.